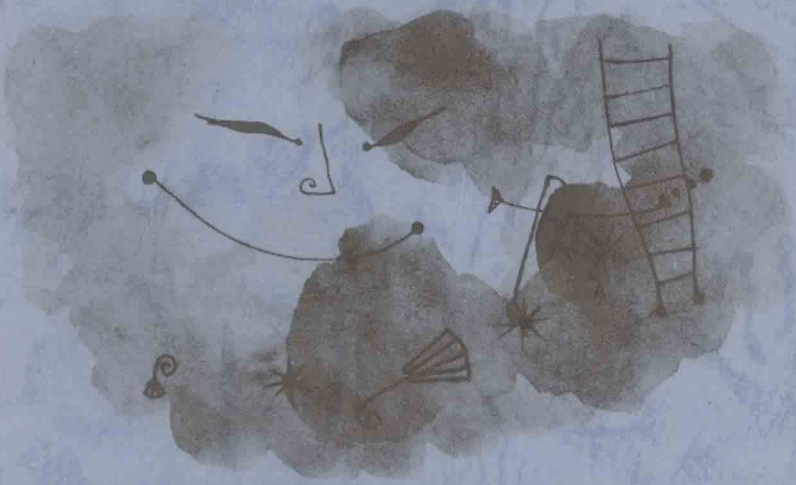
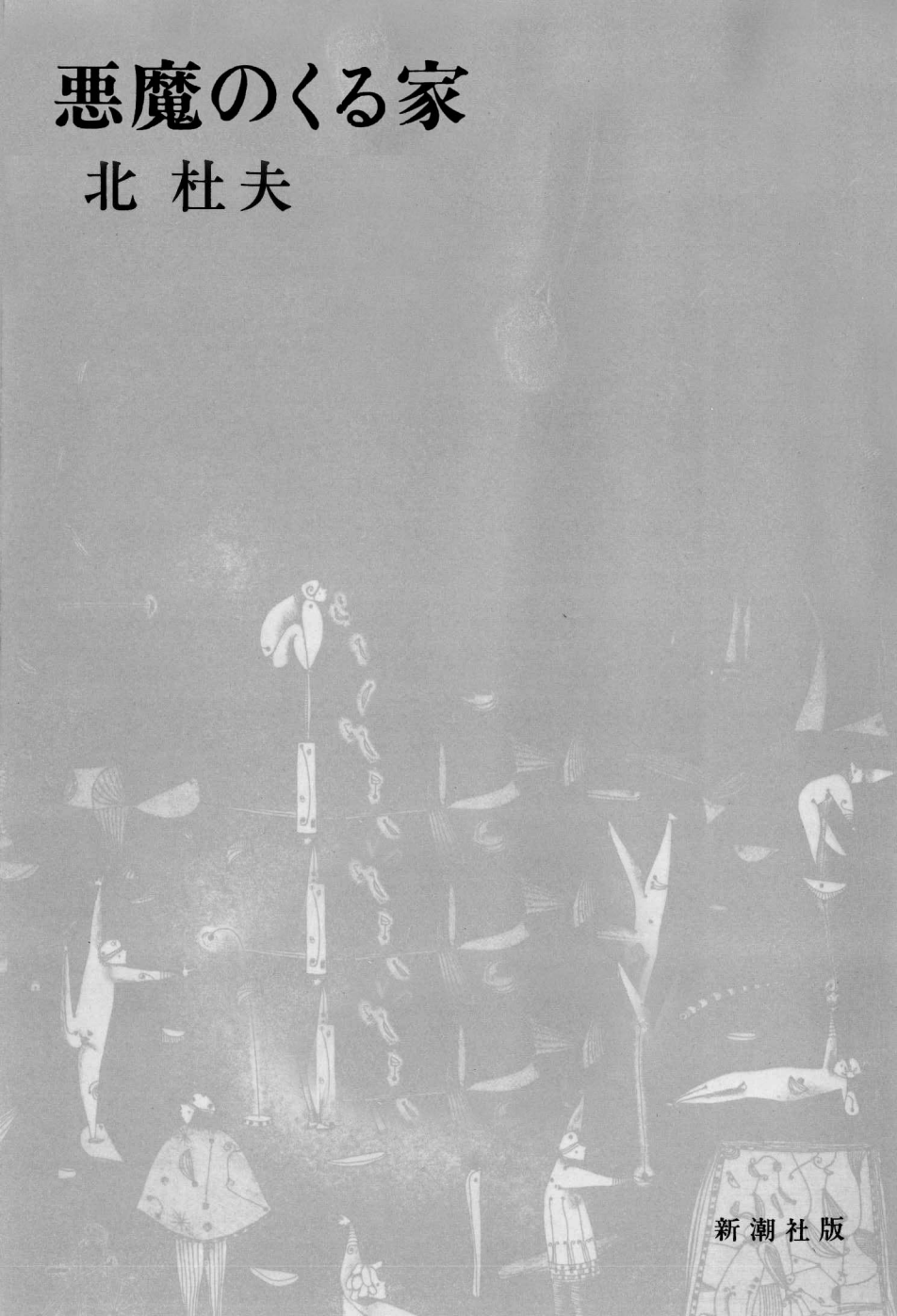
悪魔のくる家・北 杜夫



悪魔のくる家

北 杜夫



新潮社版

悪魔(あくま)のくる家(いえ)

定価　七八〇円

発　行　昭和五十三年五月　二十　日
二　刷　昭和五十三年七月二十五日
著　者　北　杜夫(きたもりお)
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京四—八〇八
電話　業務部03(266)五一一一編集部(266)五四一一
印刷所　株式会社光邦
製本所　株式会社大進堂

©1978 Morio Kita, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします

悪魔のくる家

三幕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

《登場人物》

久文とよ（85歳）久文商会創立者の故久文安光の妻。久文商会会長。

久文信也（55歳）安光の長男。久文商会社長。

久文三弥子（43歳）信也の妻。

紀子　信也の長女。大学卒。

千鶴子　信也の次女。大学生。

昌夫　信也の長男。高校生。

久文徳也（42歳）安光の三男、妾腹の子。無職。母屋から離れた別宅（舞台から見えず）に住んでいる。

千花（4歳）徳也の一人娘。

ミヨ（21歳）とよ刀自つきの小間使い。

千代（30歳）お手伝い。

奈良　ヤマト証券支店長。

興日証券支店長

古井　同証券社員。

村野証券支店長

早坂　同証券社員。

吉田　ミヨシ証券社員。

二見銀行支店長

前田　同銀行社員。

和田（71歳）和田総合病院院長。

野村（43歳）弁護士。

《舞台装置》

とよ刀自の家。震災をも太平洋戦争の空襲の災をも免れた、大正年間に建てられた日本家屋で、居間は備後畳の十畳間。格天井、床の間にはときにより松花堂や探幽の掛物、横手の違い棚には古九谷の大皿が飾られている。上方に、久文安光の写真の額。

その前方は日本庭園になっていて、池や燈籠がある設定。

信也の家。戦後かなり経って建てられた洋館で、大きな窓硝子のあるベランダ（そこから外へ出るようになっている）と、そこに通ずる洋風の部屋の一部だけが見えればいい。庭の樹や花も洋風。

この日本家屋と洋館は、長い渡り廊下でつながれていて、その途中の植込みの多い庭に木戸がある。

回り舞台で、この二つの家が代る代る現われるようにする。或いは暗転で一方の部屋のみ見えるようにする。

《時代》

昭和五十一年十月から、十二月六日の総選挙の日まで。

第一幕

初冬の或る晴れた日曜日の朝。

信也も久方ぶりに家でのんびりし、ベランダで妻や子供たちと雑談している。

信也「おい、おれにはオレンジ・ジュースをくれ。それから卵は二つ。いつものように、スリー・ミニッツ・ボイルド」

三弥子「はいはい。言われなくっても、あなたのお好みはちゃんと存じておりますわ。もう二十年……あれ？　いえ、もう二十五年あなたの妻ですもの」

信也「もうそんなになるか。もっとも、それはおまえが婆(ばば)あになってきたという

ことだ。もう顔を見るのも飽き飽きしてきた」
千鶴子「お父さま、ひどいわ。そんなことおっしゃって。いやしくもママはママよ」
信也「ママはママって、どういう意味なんだ？」
千鶴子「つまり……。ママは妻でお父さまの奥さまだってこと」
信也「そんなこと当り前じゃないか。ちゃんと戸籍もはいっている」
千鶴子「だったら、婆あなんておっしゃっちゃいけませんわ。ヤクザ者みたいな言葉じゃない？」
信也「そんなら、なんと言えばいいんだ。婆あにちがいないじゃないか」
千鶴子「つまり……。おまえも少し齢とったなとか……。昔ほど美しくはなくなったなとか。ほかに言いようがあるでしょ」
信也「もともとこいつはどこといって美しくはなかった。それどころか醜女の部類だ。おれは初めから後悔していた。ただ、こいつの実家がちっとばかり金を持っていたばかりに、いわば無理矢理政略結婚をさせられたわけだ」

紀子「まあ、なんておっしゃり方。妹も弟も聞いてるんですよ。ほんとにヤクザだわ、お父さまのおっしゃり方は。お父さまは躁病になったんじゃない？まるで北杜夫みたいだわ」

信也「なんだ？　その北杜夫とかいう奴は？」

紀子「作家です。この人の躁鬱病は有名よ。躁病になると、ふだんは気が弱くっておとなしいくせに、まるっきり出鱈目（でたらめ）になっちゃって、ナラズ者そっくりになるんだって」

信也「おまえは、その北杜夫とかいう奴のファンなのか？」

紀子「とんでもない。大嫌いよ。あれは、それこそ完全な三文作家ですもん」

信也「まあ、それほどひどく言わんでもいい。ひょっとすると、その北杜夫とかいう奴も、この芝居を見ているかもしれんからな」

紀子「そんなことあり得ないわ。あの人は演劇が嫌いで、こんな高級な劇場にくるはずがないって聞きましたわ。北杜夫が見るのは、せいぜい紙芝居よ」

信也「もういい。その北杜夫って奴は、おそらくくだらん男だろう。名前からし

て実に低級だ。おれは胸糞がわるくなってきた」

三弥子「はい、お待たせ。あなたの悪口はちゃんと聞いておりましたよ。どうせあたしは、醜女で、婆あですよ」

信也「よせったら。こっちは毎日毎晩忙しいのに、久しぶりの日曜日の朝だ。少しはノンビリさせてくれ」

昌夫「だって、そもそもぼくたちみんながノンビリしているのに、その静寂を破ったのはパパなんじゃないか」

信也「そもそも、とは何だ？　静寂とは何だ？　いつからおまえはそんなもったいぶった口のきき方をするようになったんだ？　どだい、そもそもとか、静寂とかって言葉は、文学者が使う言葉だ。家(うち)では文学は絶対に許さん。あんなものはぞっとするほど低級なものだからな。芝居を観ることも絶対に禁止する」

千鶴子「どだい、って言葉はじゃあ何ですの？　もっと低級じゃないこと？」

三弥子「もうみんな、醜い親子喧嘩(げんか)はおよしなさい。ほんとにみっともない。い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やしくも家は名門の久文商会の家ですよ。まったくもうほんとにはしたない」

信也「その久文商会も、そろそろ落目になってきた。いや、めっきりと言っていいな。おれが社長になってから……」

三弥子　シッというように口に手を当て、目くばせをしながら小声で、「子供たちのいるまえで、そんなことをおっしゃいますな」

信也「わかった。わかっている。何千万年も前からわかっている、おれには。おれはそれほどバカじゃないからな。あーあ、せっかくの日曜日が台なしだ」

昌夫「台なしにしたのは、パパじゃないか。あーあ、ぼくは土方の家に生れてきた気分だ」

三弥子「さあ、みんな、もうひとことも口をきいちゃいけません。呼吸もとめるんです」

昌夫「そんなこと言ったって、呼吸をとめたら死んじゃうじゃないか」

三弥子「もう、黙って黙って。ママはもうまるっきり、とことんまで、頭の先か

ら足の裏まで、鼻クソから臍のゴマまで嫌になりました」
昌夫「ママも、ずいぶん下品な口をきくなあ」
信也「黙らんか、みんな。おれはもう本当に怒るぞ」
千鶴子「さっきから怒ってばかりいらっしゃるのはお父さまだけじゃないの？」
信也「まあいい。さてと……。これでとにかくジュースも飲んだ。エッグも食べた。あとはカフェーだけだ」
三弥子「そんなに慌ててコーヒーをお飲みなさるから……。そら、ごらんなさい。熱かったでしょう」
信也「アチチ。まったく熱い。こんな熱いカフェーを持ってきたのはどこのどいつだ？」
昌夫「だってパパ、ぬるいコーヒーほどまずいものはないって常に言っていた人は、一体どこのだあれ？」
三弥子　ヒステリックに、「もうおやめなさい。おやめなさい。あたしは気が狂いそうだわ」

信也「おまえはもともと、生れたときから気が狂っとる。いや、別に狂いまわるというわけじゃあない。妊娠した象のように鈍感なんだ。ところで、（大声で）このどえらい騒ぎを引起したのは一体全体どこのどいつだ？（ずっと声低くなり）……まあいい。このおれだということは認めよう。おれは男らしい男だからな。ところで、さてと……。何の話を始めようかな」

三弥子「あなたは黙っていらっしゃるのがいちばんいいのです」

信也「まあ、待て。少しはおれにしゃべらせろよ。さてと。えーと。何の話にしようかな。なるたけおだやかな話題がいいな。そうだ。徳也の話にしよう。あいつほどノンビリ、ノホホンとしている奴もいないからな」

千鶴子「ほんとに徳也おじさまはノホホンとしていらっしゃいますね。あたしはパパよりも好きだわ。パパのようにすぐカッとなって怒らないし」

信也「冗談じゃない。あいつがおれにどんなに迷惑かけていることか。第一に、おれの屋敷の中の別宅に住んでいる。あの家だっておれが建ててやったのだ。第二に、あいつは未だに無職で、ノウノウとしていやがる。いくら就職しろ

って言ったって、蛙の面に水だ。大体、あいつらの生活費は誰がみてやっているっていうんだ？」

昌夫「そら、パパはまた怒りだす。でも、ぼくはこのギスギスした世の中に、徳也おじさんほど無精でノウノウとしている人は珍しいと思うんだ。稀少価値だよ。ぼくはああいう生き方のほうが好きだなあ」

紀子「昌夫さんの言うとおりよ。徳也おじさまはノーベル平和賞を貰ってもいい方だとあたし思いますわ」

信也「なあ、おれはとことんまで無理して、じっと辛抱しておだやかにそっと話すが、おまえたち、徳也一家の生活費がどのくらいかかっているかわかるか？　（急に声高くなり）それを一体誰が払ってやっているというんだ！　おまえら、自分の小遣いで少しは払ってやれ。そうすれば、徳也がどんな能無しの役立たずの男かわかるだろう。なにがノーベル賞だ。それに、ノーベルというのは間違っとる。あれはノベールというのが正しい。おれは学があるからな」

昌夫「ノベールでも何でもいいけど、徳也おじさんはパパのようにガナリたてたりしないよ」
信也「そのとおりだ。それどころか、ほとんど口をきかん。日がなブラブラして、……ああ、おれがどんなに職を持てって何億たび言ったり、命令したり、懇願したりしたかわからん」
昌夫「今度は単位が億になったね。パパのはなんでも大げさなんだよ」
信也「これが小げさにしていられようかってんだ！」
千鶴子「小げさに、なんていう日本語、あったかしら？」
信也「うるさい。これはヒューモアというものだ。それがわからんから、おまえたちはバカだと言うんだ。おそらくママの血を受継いだんだろう」
昌夫「いや、パパに似たんだよ」
信也「口のへらん子だな、まったく」
昌夫「パパだって、口がへらないじゃないか」
信也「なにお！　……まあいい。よし、まあひとまず許すとしよう。ところで何

の話だったっけな？　そうだ。徳也の奴のことだ。どだい、あいつは昼すぎまで起きてこない。もっとも夜は遅いらしいが。夜、何をしてやがるのかな？　おそらくくだらん小説なんか読んでいるにちがいない。そうだ、きっとポルノ小説だ」

三弥子「あなた……。また子供たちのまえで」

信也「何がわるい。あいつはもともと妾腹の子だからな。おやじは何人も女を囲っていた。あっぱれな人物だった。おれなんか、たった一人だ。しかし、おやじの生ませた子はザワザワといて、どれがどうなってるのか、おれには混乱して何が何やらさっぱりわからん」

三弥子「あなた。繰返しますが、子供たちの前ですよ。千鶴子だって、昌夫だってまだ子供だし……」

信也「子供？　いまの子供、殊に高校生どもが一体どこまでませているか知っとるか。それとも、試験に落第してまだ高校生になっておらんのか？」

昌夫「ぼく、ちゃんと高校生だよ。いやだなあ、パパ。合格のお祝いに、去年、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com